林芙美子

父は風琴を鳴らすことが上手であった。

私^たたが 時々尻で押しながら、 に苦労しなければならない」と、あるいはそう話しかけて していた。 た。 私たれた 音楽に対する私の記憶は、この父の風琴から始まる。 バナナを食んでいるかたわらで経文を誦しながら、 達は長い間、汽車にゆられてたいくつしていた、 かも知れない。父は、白い風呂敷包みの中の風琴を、 「あなたに身をたくしたばかりに、私はこのよう 粉ばかりになった刻み煙草を吸って 母は、 泪なみだ

あ 私達は、 0 た。 このような一家を挙げての遠い旅は一再ならず

見いよ」とでもいっている 父はまぶたをとじて母へ何か優々な \mathcal{O} であろう。 し気に語 っていた。 「今に

屹。 立。え て 写っ かか 丸 \mathcal{O} た。 旗を見ると、 げた町が した雲の景色は十四歳 んえんとした汀を汽車はは そ あ \mathcal{O} 春 0 た。 \mathcal{O} せわしく立ちあがって汽車の窓から首を 海を まぶたをとじていた父は、 用かこ の私たり んで、 の眼に壁のように照り輝 っている。 たくさん、 動か 日 な 朱かか 丸 い海 1 \mathcal{O} 旗た 日 لح を \mathcal{O}

 \mathcal{O} が町は、 祭でもあるらしい、 降# りて みん カン Þ · の う。 二